

## 4章

# 子どもの遊びにみられる芸術行為の起源

蜂谷 昌之  
(聖トマス大学)

### はじめに

私は、昨年までの2年間、山形市の東北芸術工科大学こども芸術教育研究センターに在職し、センター付属の幼児教育施設において、小学校就学前の3歳から6歳の幼児に多く接し、観察する機会に恵まれた。また、私生活では4歳の娘の父として、日常の行動や遊びに近く接する数年間を過ごしてきた。その中で、幼児のいわゆる「遊び」の中に、人間の芸術行動の原体験のようなものが潜んでいるのではないか、という気付きがあり、さらに観察を重ねるにつれ、その思いがますます強くなっていった。

今回『ヒューマンサービスにおけるアートと表現』に寄稿するにあたり、本稿では、これまでに私がかかわった子どもの遊びに見られる造形行為を集めた映像データベースをもとに、芸術教育に関するこれからの構想を述べてみたいと思う。

### 遊びと芸術

そもそも「あそび（遊び）」とはどういうことであろうか。広辞苑（第6版）によれば、遊びとは複数の意味をあわせもつ、語意の幅の広い語であることがわかる。意味の一つとして「仕事や勉強の合間」とあるように、目的をもって行われる主活動以外の部分を指す場合もある。一方、「(文学・芸術の理念として) 人生から遊離した美の世界を求めること」という記述もあり、それ自体が芸術的意識に満ちた活動であることとらえることもできそうである。また、「気持のゆとり、余裕」という意味で、「名人の芸にはあそびがある」などと用いられることがあるように、芸を極めることで生まれるある状態ということで、これも芸術との関わりを感じさせる意味となっている。

る<sup>1)</sup>。

もとに戻って、子どもの「遊び」ということを見てみると、さきほど広辞苑の記述から引用した一つ目の語意、すなわち目的を持って行われる活動以外の部分、というよりは、「遊び」自体が目的となった、主要な活動であるように見受けられる。ここで、私が観察したことも芸術教育研究センターの付属施設における、M子の遊びの様子を紹介したい。この幼児教育施設では、通常より、子どもたちの自由で自発的な活動を重視し、庭には、特定の活動を誘導するような道具、すなわち一般的な公園などに配置されているような滑り台や鉄棒、また幼児施設でよく見られるようなボールやおもちゃ類は一切置かれておらず、代りに、土、水、枝、廃品利用のカップ類、および草花や木々が庭の環境として用意されている。この日たまたま目にしたM子の活動は、私に大きな気付きをもたらしてくれたと思っている。子どもの日常的な自由遊びの中に、人間の芸術行為の起源ではないかと思われる、主体的創造活動を見ることができたからである。

この日、朝から雨の降り出しそうな空模様であったが、自由保育の時間、M子は庭で細い枝の先に水をつけ、丸太の断面に染みをつける、という行為をしていた。乾いた木の表面に水が染み、それはやがて線や点でできる絵になっていった。やがて近くで水遊びをしていた男児から、カップに水を分けてもらい、今度はベニヤ板のテーブルに同じように水の染みをつけ始めた。水を分けてあげた男児も、興味を抱いたのか、二人並んで同じ行為を始めた。やがて男児は少し太い枝を拾ってきて、さらに線を加えていった。二人の水の線は次第に広い領域となり、ベニヤ板の上で、大きな模様となっていった。

するとそこに弱い雨が降ってきた。ベニヤのテーブルにぼつぼつと雨粒が現れ、斑点模様を作り出した。二人は模様に気づき、今度は同じような小さな点をつけ始めた。

その後M子は、落ちていた小さなプラスチック製の板に水をつけたり、脇に立つ鉄の支柱にも何か模様が現れるか試しているようだった。しかしそこ

---

1) 新村出編(2008) 広辞苑(第6版)、岩波書店、p. 55.

には期待したようなはっきりとした染みは現われなかったためか、すぐにやめてしまった。

再びベニヤのテーブルに戻ったM子は、手に持っていたカップをゆっくり傾け、水を直接テーブルにかけはじめた。大きな染みの一つ、二つ、三つと加えていき、これまでで一番大きな模様が現れた。

私は、この事例により、子どもの遊びの中に芸術活動の原点があるのではないか、そして、芸術的な創作行為における起源と捉える事ができるのではないか、と思うようになった。さらに、芸術活動の基礎的な能力や美的なものを知り見分ける審美眼のはじまり、すなわち「芸術の芽」は、幼児期に自発的な行動の中で生まれ、育っていくのではないかと考えるようになった。

そこでそれを検証していくための礎として、子どもの遊びの中でも、主体的な創造活動と見られるものを映像に収めて蓄積し、データベースの構築を始めることにした。子どもの遊びと造形行為における試行や工夫や発見の様子を、整理分析していくことで、子どもの芸術的な思考や感覚を理解する一助になり、芸術の起源がどこにあるのか解明していくことにつながるのではないかと考えたのである。

### 映像データベースの構築

映像撮影は、こども芸術教育研究センターの付属幼児教育施設にて、一年以上にわたって行った。午前中に設定された自由保育の時間、子どもたちの活動の中に「観察者」として入り、日々ビデオカメラを回した。「自由保育」中、保育者は基本的に幼児の自発的な活動を保障し援助する存在となる。子どもたちは特定の課題を与えられることなく、環境の中で自由に活動することが想定されているため、主体的自発的な創造行為を撮影するには適当な時間であった。

映像記録の蓄積にあたり、いかなる行為を撮影するかに関しては、撮影者である私の恣意的な判断によるものである。「絵を描く」、「ものを作る」という造形に関する事象が顕著に観察された活動だけでなく、幼児のさまざまな行為に潜む造形芸術の芽を、可能な限り幅広く収集するため、「積み木を

箱に片付ける]、「氷を砕く」などの場面も広く撮影した。映像のデータベース構築にあたり、将来的に第三者の保育者や研究者と映像を共有する可能性を考慮し、幼児のプライバシーに配慮する目的で、基本的に活動する子どもの手元を中心に撮影することとし、個人が特定される内容は入らないよう編集した。

子どもの遊びに見られる自発的な造形行為を集めた映像データベースの内容であるが、現在80個余りの映像データが収録されている。さらにデータベースを使用する際の利便を考え、造形芸術との関連を捉えやすいよう、まず、遊びに用いられる素材・画材により分類することとした。具体的には材質の特徴から、「砂・土・泥・泥水」、「粘土」、「水・氷・雪」、「クレヨン・絵の具」、「草・花など植物」、「紙・箱材」、「積み木」、「そのほかのもの」に関するフォルダで分けた。

さらに、映像内容の詳細が分析できるように、各データには複数のキーワードを付与することとした。すなわち、「筆」、「画用紙」など道具や材料を表す名詞のほか、「空間」、「装飾」、「型取り」、「混色」など状況を表す名詞、「塗る」、「掘る」、「並べる」、「繰り返す」などの動詞を含めた。これらキーワードにより、映像データベース上で各データの概要をある程度把握することが可能になった。また、撮影期間が一年以上にわたるため、氷や雪など、地域的な特徴や季節に作用される映像データも記録することができたのが特徴である。

## ひとつの視点として

先日、この映像データベースに関する研究会を行った際、ある興味深い視点を得ることができた。研究会では、映像データの中から特徴のあるいくつかを、保育に携わる人たちに見せ、感想を述べてもらっていたのであるが、その一つに次のような映像があった。

年中の男児二人が、イチヨウの切り株の周りで遊んでいる。一人目が切り株の上に置かれたイチヨウの葉を石で叩いてつぶし、さらに二人目がその上から砂をかけていく。私は、この様子を撮影しながら、叩いてつぶすという、

形に変化をもたらす破壊的な行為と、切り株に置かれたイチヨウの葉の上に砂をかけるというデザイン的な思考が、この二人の行為にあるのではないかと考えていた。

この映像を見て、研究会のある参加者が、「儀式のようである」とコメントした。映像の中の、「葉っぱを叩きつぶす」イコール「死」、「砂をかける」イコール「弔う」という印象が頭に残り、最近体験したお葬式の印象が重なったのであるという。

「子どもでも大人でも、自分が情を感じたもの（人に限らず虫や花なども）が死んだり、傷ついたりしたら、慰めようとすると思います。土をかけて地中に返してあげることは、慰めや弔いの形としてよく行う事なので、映像の中で土をかけていた子は、葉っぱのお弔いをしているのだと思ったのです。形式的に社会で行われているお葬式を、本能的に子どもたちは遊びの中でしているのかもしれないと感じました」（コメントをそのまま引用）。

このコメントとは別に、この映像を見た研究センターの研究員でもある民俗学者が、別の機会に同じような指摘をしていたので、さらに興味深く感じられた。それは、この映像データに見られる子どもの行為を、芸術と儀式をまたぐものとして見ることができるのでは、というものであった<sup>2)</sup>。映像の中に見られる子どもの行為の中には、「通過儀礼」とも形容できるような、人間が生きていく中でキーワードとなる儀式や習俗の片鱗があるように感じられるという指摘は、今後子どもの遊びに見られる「芸術の起源」を考えていく上で、大変興味深い、ひとつの視点を与えてくれたように思う。

## おわりに

最後に、私がかかわっているこの映像データベースの活用について少し述べてみたい。現在、公教育における芸術科目のウェイトは少なくなる一方である。例えば、小学校における図画工作科は週1時間まで削減されている現

---

2) 森繁哉 (2008) 反転する芸術、あるいは子どもと芸術への接近－日常保育の断片から、子ども芸術教育研究、第3号、pp. 11-14を参照されたい。

状である。幼児教育の現場においても、造形活動の意味や重要性が把握されきれずに日々の活動の中で流されて行っている感は否めない。北米でも芸術科目は主要科目の脇に追いやられ、ようやく姿を留めている学校も少なくない。このような現実の中で、芸術行為が人間の活動の中で主幹をなす重要な意味をもつものであることを再確認する作業が求められているのではないかと思う。

まずは、この映像データベースを、文字通り、人間の芸術の起源を探るための研究の基礎とするほか、幼児教育における遊びや造形の教育的な意図に基づいた活動計画、また小学校や社会教育における子どもの美術・芸術教育の意義やあり方を考える上での一つの材料としていくなどの活用ができるのではないかと考えている。

芸術（アート）が、人間の「生」を支える一つの大きな柱として認識され、教育や福祉など、さまざまな分野で意義深い活動が展開されていくよう願っている。そのためにも、子どもの遊びに見られる「芸術の起源」に関する研究をさらに進めていきたい。